

## 物名による語順の制約

佐伯哲夫

## はじめに

三代集のうち古今集(九〇五)と拾遺集(一〇〇五以後)には「物名(ものゝな、ぶつめい)」の部立があるが、ここでは物名による語順制約のありようを両集比較考察してみようと思う。歌群の一面についての文体考察である。なお、両集成立に百年の開きがあるが、作歌年代の広がりを考えて、今は通時的な観点を捨てる。

主たる考察対象となる歌数は、古今集巻第十が四七首(五五物名)、拾遺集巻第七が七八首(九一物名)である。テキストには、日本古典文学全集本の『古今和歌集』(小沢正夫校注・訳、昭四六、小学館)と新日本古典文学大系本の『拾遺和歌集』(小町谷照彦校注、平二、岩波書店)を用いるが、あわせて『藤原定家筆 古今和歌集』(藤原定家筆 拾遺和歌集)(ともに久曾神昇編、平三、平

二、汲古書院)を参照する。<sup>註)</sup>

なお、佐伯(一九七五a)では、古今集の物名歌に「物名詠み込みに伴う無理によって生じた変位」のあることを、五〇〇首の標本から推定した。△変位▽とは係り成分相互の語順のうち、基本的語順にもとるものと言うが、これについてはのちに、方法を変えて調べる。また、例示する歌の仮名遣はすべてテキストの表記に従う。

## 一 語順を制約していない物名

物名が一つの受け部、あるいは一つの係り成分に収まっている場合、その物名は語順を制約しない。たとえば、

① 袂よりはなれて玉を包まめや「これなむそれと移せ見むかし」  
(古今四二五、うつせみ)「カギは文末、……は受け部」  
には「うつせみ」の題が隠されている。だが、この歌ではそれが、

文の受け部の、動詞を核とする述語に収まっていて、この歌の語順を制約してはいない。また、

②のちまきのおくれて生ふる苗なれどあたにはならぬたのみとぞ

聞く(古今四六七、ちまき)

には「ちまき」が隠されている。だが、この歌ではそれが「後蔭のおくれて生ふる苗なれど」という名詞的従属節に収まっていて、この歌の語順的制約に関与しない。また、

③夏草のうへは繁れる沼水のゆく方の なきわが心かな(古今四

六二、かたの) 「——は係り成分」

には「かたの〔交野〕」が隠されている。だが、この歌ではそれが連体節「夏草のうへは繁れる沼水のゆく方のなき」の受け部「なき」に係っていく主語文節「ゆく方の」に収まっていて、この歌の語順的制約に関与しない。さらに、

④神なびのみむろのきしや 崩るらん(龍田の河の水のにこれ

る) (拾遺三八九、むろの木)

には「むろのき」が隠されている。ただ、この歌ではそれが、文末の受け部「崩るらん」に係っていく連文節の主語「神奈備の三室の岸や」の一部に収まっていて、この「係り↓受け」の語順を制約してはいない。

が、この④が③と違うところは、④の「かたの」が語順的制約に

全く関与していないのに対し、④の「むろのき」は連文節の内部にあって「みむろのきしや」の語順を「連体語↓名詞」という正置の方向で規制している点にある。

このように、語順的制約に直接関与していない物名を次に抜き出しておく。ただし、「ウ その他」に入れるものは、語順的制約に無縁の、拍(音節)の先後制約にかかわるものである。

ア 受け部に収まっている物名

○ハ古今√七例(七物名)

移せ見むかし(四二五、うつせみ) 立ち離れ行く(四三〇、  
たちばな) あらざらめども(四四五、めど) 待つ(四五四、  
まつ)「松」(なし) (四五五、なし)「梨」(敷きなつめそ  
(同、なつめ) のちまきのおくれて生ふる苗なれど(四六  
七、ちまき)

○ハ拾遺√一一例(一一物名)

ひ「挽」(くらし) (三七一、ひぐらし) ひ「弾」(くらし) (三  
七二、ひぐらし) き「裂」(けからみてぞ(四〇八、さけか  
らみ) したとみてこそ(四一三、したとみ)「小蝶」(た  
ちはなれなば(四一六、たちばな) ね「寝」(て(四二九、  
ね) う「憂」(しとちこそは) (同、うし・とら) た「立」  
つ(同、たつ) き「去」(る(四三〇、さる) い「去」(ぬ

る(同、いぬ) る[宰]て(同、ゐ)

イ 連用係り成分に収まっている物名

○△古今▽二例(二物名)

逢ふ日の(四三三、あふひ) のちに逢ふ日の(四三四、あふひ) あくたに(四三五、くたに) わらび[藁火]と(四五三、わらび) いさまめに(四五四、さき) 日は(同、びは) 心ばせをば(同、ばせをば) あひくる身をば(四五五、くるみ) ゆく方の(四六二、かたの) 月の桂の実やは(四六三、かつらの宮) 春霞なかし(四六五、すみなかし)

○△拾遺▽二六例(二六物名)

あだ人のまがきちかう(三六三、まぢちかう) わびしらにこそ(三六六、らに) おもひくらしの音をのみぞ(三七〇、ひぐらし) 白浪のうちかくるすの(三七七、くるすの) 水もなく舟もかよはぬこのしまに(三七八、このしま) 誰見よとかは(三七九、よどがは) 太刀のをがはのはしのみぞ(三八一、をがはのはし) 神なびのみむろのきしや(三八九、むろの木) きさ[象]のきにこそ(三九〇、きさの木) 底のも[藻]も(三九二、も) とねり[舎人]がきぬも(三九四、ねりがき[柿]) 河ぎしのをどりおるべ

ウ その他

○△古今▽二例(二物名)

小倉山峰たちならし嚙く鹿の経にけむ秋を知る人ぞなき(四三九、「をみなへし」の折句) 花のなか目に鮎くやとてわけゆけば心ぞともに散りぬべらなる(四六八、はる)

○△拾遺▽にはない。

右に挙げた物名数すなわち語順の制約に直接関与していない物名数を集別に示せば次のようである。

表1 語順を規制していない物名

拾遺	古今	受け部に係り成分に収まる		計
		係り成分に収まる	その他	
一一	七	一一	二	二〇(五五種の三六・四%)
二六	〇	〇	三七(九一種の四〇・七%)	

この表の比率に見るかぎり、語順を規制していない物名は拾遺集にやや多いことがわかる。

以下の考察は、残る

古今集 三五物名 五五種の六三・六%

拾遺集 五四物名 九一種の五九・三%

について進めることになる。かぞえる時は、中に同一歌や重出歌があるが、今はそのままとする。

## 二 文連鎖と成分添加

右には、物名が一連用成分または係り部に収まっていて語順的制約に無縁の物名を見てきたが、ここに取り上げる二つは語順的制約のゆるやかな物名である。

### (一) 文連鎖

○△古今▽にはない。

○△拾遺▽四例(四物名)

⑤紫の色にはさくなむさしのの草のゆかりと人もこそ見れ

(三六〇、さくなむさ)〔以下、物名に傍線を付すことがある〕

右の例では、物名「さくなむさ」「石南草」が二文の先後を規定しているものの、文中の語順には無縁である。この類の物名を挙げておく。

立ちていぬかひの見ゆるは果守なりけり(三八三、いぬかひのみゆ〔御湯〕)

あだなりなとりのごほりに知らぬか(三八五、なとりのこほり)

見てしがなとりのみ行けばなし(三八六、なとりのみゆ)

### (二) 成分添加

○△古今▽にはない。

○△拾遺▽一例(一物名)

⑥いきりせし海人の教へしいづくそやしませめぐるどでありといひしは(四〇〇、そやしませ)

これは後の「係り成分と受け部の倒置」に近い。だが、違うところは、傍線部「しまめぐるどでありといひしは」が「教へし(こと)」を具体的に述べた成分であって、他の成分と入れ換えて正置

に直すことが出来ない点にある。それにこの歌では、この添加成分がなければ物名「そやし豆」の詠み込みができない。すなわち、この歌には物名詠み込みのための添加操作が加えられていると見る。

右の文連鎖と運用成分添加は、古今集に無いが、拾遺集では合わせて五例（九一物名の五・五％）を占める。拾遺集における物名使用の一特色とすることが出来ようかと思う。

### 三 倒置と挿入

ここでは物名が語順を制約しているもののうち、倒置、挿入にかわるものを考察する。

#### (一) 倒置

これを二つに分けて見ていく。

##### a 節相互の倒置

「従風節↓主節」の正置のままでも物名詠み込みのうまいっている例が、古今に二例、拾遺に三例ある。

⑦ 朝露をわけそほちつつ花見ひと今ぞ野山をみな経<sub>レ</sub>知りぬる

（古今四三八、をみなへし）〔カギは節末〕

⑧ ふりはへていざ故里の花見ひと来しを<sub>レ</sub>にほひぞ移ろひにける

（古今四四一、しをに）

⑨ かゞり火の所きだめず見えつるは流つゝのみ<sub>レ</sub>たけばなりけり  
（拾遺三八八、つゝみのたけ、抄つゝのみたけ）

⑩ 雲まよひ<sub>レ</sub>はしのあゆく見えつるは螢の空に飛ぶにぞ有ける

（拾遺四〇九、火ほしのあゆ）

⑪ 事ぞとも聞きだにわかずわりなくも人のいかるが<sub>レ</sub>にげやしな

まし（拾遺四二〇、いかるがにげ）

これに対し、次は倒置の例である。

○△古今▽一例（一物名）

⑫ あな憂<sub>レ</sub>目につねなるべくも見えぬかな<sub>レ</sub>恋しかるべき香はに

ほひつつ（四二六、うめ）

右の例では主節（終止形式で終る節）「目につねなるべくも見えぬかな」と従風節（接続形式で終る節）「恋しかるべき香はにほひつつ」が倒置されている。ところが、これを正置に戻すと「あな憂<sub>レ</sub>恋しかるべき香はにほひつつ目につねなるべくも見えぬかな」となる。五七五七七の短歌拍数律が崩れるばかりではなく、物名「うめ」「梅」が分かれ破れてしまう。この種の倒置は古今集にはこの一例だけである。

○△拾遺▽二例（二物名）

⑬ 旅のいは やなきとこにも寝られけり<sub>レ</sub>草の枕に露は置けども

（三五六、いはやなき）

右は正置に戻すと「いはやなぎ」が分かれ壊れてしまう。

⑭難波づは くらめにのみぞ舟は着く」朝の風のさだめなければ  
(四〇六、つばくらめ)

右は正置に戻すと「つばくらめ」が分かれ壊れてしまう。拾遺集  
には右の二例が見られる。

b 係り成分と受け部の倒置

「係り成分↓受け部」の正置のまま物名読み込みのうまくいっ  
ている例は兩集とも次のように多い。

○古今▽一九例(一九物名)

粟く↓ひず(四二二、うぐひす) 来べきほど 時↓過ぎぬれ  
や(四二三、ほととぎす) 波の打つ瀬↓見れば(四二四、うつ  
せみ) 波のなかには↓さぐられで(四二七、かにはざくら)  
鶯も ものは↓ながめて(四二八、すももの花) いかが↓つら  
しと(四三三、かつら) わが↓つらきにや(四三四、かつら)  
糸を みな↓へし(四三七、をみなへし) 野山を みな↓經  
知りぬる(四三八、をみなへし) わが宿の花踏みしだく鳥↓打  
たむ(四四二、りうたむの花) 嵐の↓吹く「里は」(四四六、  
しのぶぐさ) 峰の雲にや↓まじりにし(四四七、やまし) な  
にかは↓なぐさまむ(四四九、かはなぐさ) ただひとさかり↓  
瀧けれども(四五〇、さがりごけ) 命とて露を頼むに↓かたけ

れば(四五二、にがたけ) なかば↓たけゆく(四五二、かはた

け) 沖から↓さきて(四五九、からさき) うばたまのわが黒  
髪や↓かはるらむ(四六〇、かみやがは) 沖↓ひむときや(四  
六六、おき火)

○拾遺▽二八例(二八物名)

鶯にまさるとりのは↓なくこそ有けれ(三五七、さるとりの花)  
わたつ海の沖なかに ひの↓はなれ出でて(三五八、かにひの  
花) 我しも↓つけむ(三六一、しもつけ) 今より↓うたむ(三  
六二、りうたむ) むげに↓こじとは(三六五、げにこじ) 山  
河はきのは↓ながれず(三六八、はぎのはな) たま↓つむ「し  
ら波は」(三六九、松むし) ひと↓もどきくる(三七三、ひと  
もとぎく) 鶯のすは↓うごけども(三七四、すはうごけ) 我  
や↓まどはむ(三七五、やまと) くまの↓くらはむ(三八二、  
くまのくら) 立ちていぬ「かひの↓見ゆるは(三八三、いぬか  
ひのみゆ) 見てしがな」とりのみ↓行けば(三八六、なとりの  
みゆ) さは↓この見ゆる山のあなたか(三八七、さはこのみゆ)  
何かは↓なかむ「しのぶ許に」(三九一、はなかむじ) しばし  
ば↓見ゆる(三九三、はしばみ) 池を↓はりこめたる(三九五、  
おはりこめ) まつ↓たけ(三九六、まつたけ) にく↓たち  
ぬる(三九八、くたち) こにや↓くままし(三九九、こにや

く) 秋のやまからめぐり来し(四〇二、山がらめ) ひばら

↓かすみて(四〇七、はらか) まよひ「ほしのあゆくと(四

〇九、火ぼしのあゆ) をし↓あゆかすな(四一〇、をしあゆ)

けき↓はやければ(四一四、さはやけ) 離れていかむ「なぐる

↓まつほど(四一九、むなぐるま) なぎさのきは↓こがれて

ぞ(四二三、きさのきはこ) をのがじし↓よくにちりぬる(四

三一、四十九日)

これに対し、次は倒置の例である。

○△古今▽にはない。

○△拾遺▽二例(二物名)

⑭五月雨ならぬ限は郭公 何かは なかむ「しのお許に(三九

一、はなかむじ)

この例は右に「何かは↓なかむ」の正置としてもとりあげた。が、

ここではまた「なかむ」という受け部と「しのお許に」という情態

を表す語句が倒置法をとっている。これを正置に戻すと「五月雨に

ならぬ限は郭公何かは しのお許になかむ」となり、物名「はなか

むじ「花柑子」が分かれて壊れてしまう。

⑮藤銅のまだも来なくに つなぎ犬の離れていかむ「なぐるまつ

ほど(四一九、むなぐるま「空車」)

これを正置に戻すと、物名「むなぐるま」が分かれ壊れてしま

う。ともあれこれら倒置をひとまず物名詠み込みに伴う無理操作と  
みなす。

(二) 挿入

○△古今▽二例(二物名)

⑯あしひきの山辺にをれば白雲の いかにせよとか はるる時な

き(四六一、よどがは)

右の例では傍線部が挿入句であるが、この挿入によって「よどが  
は」がうまく詠み込まれている。

⑰花のなか 目に飽くやとて わけゆけば(四六八、ながめ)

これも挿入句なしでは物名詠み込みが出来ない。

○△拾遺▽四例(四物名)

⑱我が宿の花の葉にのみ寝る蝶の いかなるあさか ほかよりは

来る(三六四、あさがほ)

⑲白雲の いかにせよとか はるる時なき(三八〇、よどがは)

右は古今の⑳と同歌である。

⑳何とかやくきの姿は思ほえて(四〇三、かやくき)

「何とかや」は歌頭に位置するが、今は挿入として処理する。

㉑この家はうるかいりても見てし哉(四二一、うるかいり)

これら挿入は物名詠み込みのための積極的な技法であるが、無理

操作とみなす。表2は倒置・挿入によって生かされた物名数である。

表2 無理操作（倒置・挿入）

拾遺	倒置		挿入	計
	節	係り受け		
古今	一（二・八%）	〇	二（三・六%）	三（五・五%）
拾遺	二（二・二%）	二（二・二%）	四（四・四%）	八（八・八%）

（%は古今の場合は物名五五種に対する、拾遺の場合は物名九一種に対する比率）

なお、古今、拾遺それぞれ、物名の巻以外のすべての巻を範囲とする、節、係り受けの倒置数、挿入句数は表3のようである。

表3 物名の巻以外（倒置・挿入）

拾遺	倒置		挿入	計
	節	係り受け		
古今	五（五・二%）	四〇（三・八%）	八〇（八%）	一〇三（九・八%）
拾遺	七（五・六%）	六五（五・一%）	五〇（四%）	一四一（二・一%）

（%は古今の場合は一〇五三首に対する、拾遺の場合は一二七三首に対する比率）

ただし、この数値はおおまかなもので、かぞえ方によっては数例

の範囲で動く可能性がある。一つに「なくに」「ものを」など従属節末か主節末が見分けにくい場合があること、二つに節、係り成分とも倒置か挿入か添加か見分けにくい場合があること、などによる。

ただ、これを曖昧なままに示すのは、このままで表2、表3の各比率を十分比較考察に耐えうるものと見るからである。

すなわち、ここで言えるのは次のようなことである。

ア 古今、拾遺とも、そして主節と従属節の倒置や係りと受けの倒置については、物名の巻以外のそれらに比べ、物名のかかわるその比率が十分に低い。したがって、物名詠み込みの無理操作と見られるものも、実は和歌の持つ拍数律の制約の域を出ない便乗的な性格のものである。

イ これに比べ、古今、拾遺とも、挿入句については、物名の巻以外のそれに比べ物名のかかわるその比率が十分に高い、これは物名詠み込みに伴う無理操作によるものとみなせる性格のものである。

#### 四 係り成分相互の変位

ここに拾い上げるものの第一は、一つの物名が二つ以上の係り成分の先後を規制している場合で、次の例がこれである。

② 逢ふからもものはなほこそかなしけれ」別れむことをかね



て思へば(古今四二九、からももの花)

右の歌では、物名「からもものはな」が時間的出発点を表す「違ふからも」と、主格として処理する「ものは」と、程度を表す「なほこそ」の先後を規制している。が、これらが基本的語順にあるか否かを調べる。

第二に、一つの物名が係り受けを、またその逆を規制しているもので、結果的に、その係りが他の係りとともに同一の受けに係っている場合である。たとえば、

◎花の色は ただひとさかり 澁けれども かへすがへすぞ露は 染めける (古今四五〇、さがりこげ)

右の歌では、物名「さがりこげ」が係り受けにまたがっているが、時間的情態を表す「ただひとさかり」がその前の題目語「花の色は」とともに「澁けれども」に係っていき、しかもそれが後位に限定されているので、拾い上げる。また、

◎紫の色にはさくな むさしの草のゆかりと 人もこそ 見れ (拾遺三六〇、さくなむぎ)

右の歌では、物名「さくなむぎ」が前文の受けから後文の係りにまたがっているが、内容を表す語句「むさしの草のゆかりと」が、そのあとの題目語「人もこそ」とともに「見れ」に係っていき、しかもそれが前位に限定されているので、拾い上げる。で、こ

れらが基本的語順にあるか否かを調べる。

ただし、

◎飽かずして別れし人の住む里は さはこの見ゆる山のあなたか (拾遺三八七、さはこのみゆ)

の「さは」は文脈指示語で、その「さ」は直前の「飽かずして別れし人の住む里」を指していて、この両成分に先後の自由はない。よってこのような物名は捨てる。

そこで、以下においては、係り成分相互の先後傾向を見ていこうと思う。現代文の係り成分相互の語順はたとえば次のような傾向がある。

△成分的条件による▽

広く深く係っていく成分ほど前に来やすい。<sup>注4</sup>

△構文的条件による▽

ア 長い成分は短い成分より前に来やすい。

イ 承前成分(指示語の有無にかかわらず)はそうでない成分より前に来やすい。

ウ 題目化された成分はそうでない成分より前に来やすい。

だが、万葉・古今・新古今のそれに関しては、佐伯(一九七五a)でも構文的条件の方の「ア」しか確かめられていない。

で、たとえば、

④わたつ海の沖なかに ひの はなれいでて (拾遺三五八、かひにはな)

のように、文節単位にかぞえて、前成分が後成分より長い組み合わせのものをもまず排除する。

次がこの排除するものである。

○八古今√五例 (五物名)

みよしのの吉野の滝に浮かびいづる泡をか↓玉の消ゆと (四三一、をがたまの木) うつせみの世をば↓なしとや (四四三、をばな) 空蟬の蛸は↓木ごとに (四四八、からはぎ) うばたまの夢に↓なにかは「なぐさまむ」 (四四九、かはなぐさ) 花のなか↓目に (四六八、ながめ)

○八拾遺√九例 (九物名)

先の④のほかに、

むさしのの草のゆかりと↓人もこそ (三六〇、さくなむさ) 植へて見る君だに知らぬ花の名を↓我しも (三六一、しもつけ) 白露のかゝるが↓やがて (三六九、かるかや) たぎつ瀬の中に↓たま (三六九、松むし) あらふね「根」のみや↓しらく (三八四、あらふねのみやしろ) その火↓まつ (三九六、まつたけ) 猿沢の池のつゝみや↓きみは (四一一、つゝみやき) かのかは「河」の↓むかはぎ (四二六、かのかはのむかはぎ)

残るところに求められるものは、

ア 成分的条件 (成分そのものに備わった職能) に基づくもので、国立国語研究所 (一九六四) の「純計」に準じるもの

かつ、

イ 物名の制約を受けているもの

の先後実態である。そしてこれが、古今集に二六組、拾遺集に二三組ある。

そこで、これら組み合わせのうち変位にあるものを調べ、その上で兩集における差異の有無を見ていくが、その前に正位・変位を次の要領で規定する。

ア 古今集、拾遺集それぞれにおいて、物名の巻 (古今第十、拾遺第七) 以外のすべての巻を範囲とし、右の純計に準じるもの (古今五一九組、拾遺七五五組) の先後を調査する。ただ、これらの巻々にも物名の含まれることがあるが、今は無視する。この結果は、成分的条件に各歌集の文体的条件の加わった性格のものである。

イ 物名の制約を受ける組み合わせのうち、その先後がアの先後傾向に一致する場合、これをもって「正位」にあるとする。そしてその先後がアの先後傾向に反する場合、これをもって「変位」にあるとする。

ウ なお、各係り成分の類別については意味を重視するが、認定

成分にはここにかかわるものとして、およそ次のようなものを設ける。

△感情系列▽感動語 評釈語 時間的情態 情態 程度

△論理系列▽接続語 題目語 時間語

時間の出発点 時間的経路 時間的位置 時間的限界

出発点 経路 位置 場面 限界 到達点

主語 共動者 相手 対格 対象(が) 量数 方向

内容 資格

△経緯系列▽基準 比較基準(より) 原因 手段 目的 結

果

調べた結果は次のようである。

○△古今▽変位五例

◎秋は来ぬいまや(時間語)まがきのきりぎりす(主語)夜な夜

な鳴かむ風の寒さに(四三二、やまがきの木)

物名の巻以外では、

主↓時 9 △郭公(主語)こずゑはるかに 今ぞ(時間語)鳴

くなる(一四二)

時↓主 7 △山里は冬ぞ(時)さびしき(主)まさりける(三

一五)

で、先後傾向はないに近い。

◎山高みつねに(時間的情態)嵐の(主語)吹く里にはほひもあ  
へず花ぞ散りける(四四六、しのぶぐさ)

物名の巻以外では、

主↓時情 14 ○郭公(主)夜ぶかく(時情)鳴きて(一五三)

時情↓主 5 × まだき(時情)時雨の(主)降りぬるは(七六

三)

◎秋ちかう(結果)野は(主語)なりにけり白露の置ける草葉も

色かはりゆく(四四〇、きちかうの花)

物名の巻以外では、

主↓結 19 ○駕も(主)はては物憂く(結)なりぬべらなり

(一一八)

結↓主 2 × みをつくしとぞ(結)我は(主)なりぬる(五六七)

◎白露を玉にぬくとやささがにの(主語)花にも葉にも(到達点)

糸を(対格)みな(量数)へし(四三七、をみなへし)

物名の巻以外では、

対↓到 5 △女郎花(対)わが住む宿に(到)植えてみましを

(二三六)

到↓対 4 △我やは花に(到)手に(対)ふれたる(一〇六)

で、先後傾向はないに近い。

「花にも」と「葉にも」は並立の關係にあり、一文節相当として扱った。同じ歌の二重傍線部は「主語・量教」の順である。物名の巻以外では、

量→主 2?ひと日も(量)み雪(主)降りぬ日はなし  
(三二二)

主→量 1?霜(主)八たび(量)置けど(一〇七五)  
で、先後傾向はほとんど云々出来ない。

なお、以上の物名の巻以外のところで、例教の下に参考までに付けた○×△?の印は次のようである。

古今、拾遺より大きな古今時代、拾遺時代の歌を母集団とし、ここに採集したものがそれぞれの標本資格を備えていると仮定して、<sup>2</sup>検定(比率の検定)を行う。その結果、危険率5%で、母集団でもそれが優勢だと言える語順に○、劣勢だと言える語順に×、優勢の言えない語順に△、標本が小さすぎて検定にかからないものに?を付けた。

こうしてみると、変位らしい変位は㊦㊧の二組だけで、少ない。だが、物名の巻以外のすべての巻では古今一三・九%(五一九組のうち七二組)が変位であるのに対し、物名の巻の方は一九・二%(右に見たように二六組のうち五組)が変位と、その比率が五・三

%も高い。そして、この変位率の相対的な高さは物名の語順制約によるものと考えられる。

○八拾遺▽変位七例

㊦春風の(主語)けさ(時間語)はやければ鶯の花の衣もほころびにけり(四一四、さはやけ)

物名の巻以外では、

時→主 20 ○もみち葉の流るゝ時は(時)竹河の淵の緑も(主)色変はるらむ(一一三一)

主→時 5 ×郭公(主)今ぞ(時)山辺を鳴きて出づなる(一〇二)

右の組合せに限って言えば古今と拾遺とでは㊦に見るようになり、変位の認定が異なる。語順にかかわる一文体差とも言えようか。

㊧五月雨にならぬ限は郭公(主語)何かは(評釈語)なかむしの

ぶ許に(三九一、はなかむじ)

物名の巻以外では、

評→主 24 ○あやしくも(評)鹿の立ちどの(主)見えぬ哉(一二八)

主→評 11 ×恋しき(主)いかで(評)尋ね来つらん(九一四) ㊨秋風の(主)四方の山よりをのがじし(評)ふくにちりぬる紅

葉かなしな(四三一、四十九日)

前の◎と同じ組合せ先後である。

なお、この組合せ語順傾向は古今におけるのと同様である。

◎底へ(到達点)うの(主語)かは浪わけて入りぬるか待つほど過ぎて見えずもあるかな(四二五、へう「豹」のかは)

物名以外の巻では、

主→到 11〇花の木は(主)籬近くは(到)植へて見じ(一) 八六)

なお、古今におけるこの組合せ語順は五対五で、優劣がない。◎のところで述べたように、これまた語順にかかわる一文体差と言えようか。

◎あだなりと(内容)ひと(主語)もどきくる野辺しもぞ花のあたりを過ぎがてにする(三七三、ひともとまきく)

物名以外の巻では、

主→内 15△八十氏人も(主)あたら世のためしなりとぞ(内) さはぐなる(五七四)

内→主 10△かりにとて(内)我は(主)来つれど(一六五) この傾向は古今でも七(△)対三(△)で変わりがない。

◎面影に(結果)しばしば(時間的情態)見ゆる君なれど恋しき

事ぞ時ぞともなき(三九三、はしばみ)

物名以外の巻では、

時情→結 4△やがても(時情)秋に(結)なりにける哉(八) 四〇)

結→時情 2△野伏に(結)とくも(時情)成にける哉(五二) 八)

先後傾向はないに近いが、古今でもこの組合せ順序は二対〇で少なく、先後傾向は云々出来ない。

◎駕の巢作る枝を折つればこうば(対格)いかでか(評釈語)生まむとすらん(三五四、こうばい)

物名以外の巻では、

評→対 24〇葦鶴のなか(評)諭を(対)ゆづらざりけん(四九七)

対→評 10×いにしへを(対)さらに(評)かけじと(九九一) なお、この組合せ語順の傾向は古今におけるのと同様である。

こうしてみると、変位らしい変位は◎◎◎◎◎の五組で、これは古今の二組より多い。

以上の係り成分相互の変位を無理操作とみなし、その比率を表4に示す。

表4 無理操作(変位)

	物名	物名の巻以外	物名の方が
古今	一九・二% (二六組中五組)	一三・九% (五一九組中七二組)	五・三%高い
拾遺	三〇・四% (二三組中七組)	二〇・七% (七五正組中一五六組)	九・七%高い
拾遺の方が	一一・二%高い	六・八%高い	

右の比率からは次のことが読みとれる。

ア 総体的に、変位率は古今集より拾遺集の方が高い。

イ これは物名がらみのものについても同様である。

ウ 古今集でも拾遺集でも、変位率は物名がらみの方が高い。

### 五 まとめ

本稿に見てきたところを整理しておく。

ア 語順を制約している物名の比率は拾遺集より古今集の方がところもち高い。

イ 語順を制約している物名のうち、文連鎖や成分添加を制約しているものは、拾遺集の方に見られるが、古今集の方には見られない。

ウ 倒置については、古今集、拾遺集とも、そして主節と従属節の倒置、係りと受けの倒置とも、物名詠み込みに活用されているとは言えない。

エ 挿入句については、古今集、拾遺集とも、物名詠み込みに積極的に活用されているとみなすことができる。

オ 係り成分相互の変位については、物名詠み込みに積極的に活用されているが、特に拾遺集の方において活用度が高い。

これらのことから、物名による語順制約の性格は両集、次のように言えようかと思う。

〔古今集における物名による語順制約は、方法的に見て、係り成分相互の変位を主体に、句の挿入を加えたものである。〕

拾遺集における物名による語順制約は、係り成分の変位を主体にする点、古今集に似ているが、句の挿入、それに文連鎖や成分添加など、より多様な方法が見られる。

なお、倒置、変位の比率に関しては、総じて拾遺集の方が高い。拾遺集の物名詠み込みに、それだけ無理操作が行われているということである。〕

注1 俊成の『古来風躰抄』(日本古典文学全集本による)にも「なほ、古今・後撰に洩れたる歌も多く、当時の歌人の歌も良き歌

多かりける上に、万葉集の歌、人麿・赤人が歌をも多く入れられたれば、」とある。

- 2 古今集の場合、古典文学全集本は定家本の中の貞応元年（一二二二）十一月本を底本とするもの、定家筆本は嘉祿三年（一二二七）閏三月十二日書写と推定されているもので、旧「伊達家古今和歌集」。巻第十（物名の巻）について見ると、貞応元年十一月本で「白露を玉にぬくとや」（四三七）、「秋くれど」（四六三）となっているところが、定家筆本で「白露を玉にぬくやと」「秋くれば」になっているなどの違いが見えるが、物名にかかわるところに違いは見られない。

一方、拾遺集の場合、新日本古典文学大系本は定家自筆本（天福元年、一二三三）を随写した中院通茂筆本を底本とするもので、「新編国歌大観 第一巻」（四五八）におけるそれ（解題、片桐洋一）にも採用されているもの、定家筆本はその祖本と目されるもの。巻第七（物名の巻）について見ると、双方に歌形の違いは見られない。

- 3 たとえば「たぎつ瀬の中にたまつむしら波は」（拾遺三六九、松むし）は一つの係り成分中に「まつむし」を含んでいるが、この物名はその前に「たまつむ」の係り受けとして、さらに「たぎつ瀬の中にたまつむしら波は」という「連体語→名

詞」としても働いている。ここでは連用係り優先の方針で、このように他の大きな連用成分に、いわば二次的に含まれる例は取り上げない。

- 4 徳永・田中（一九九一）は、佐伯（一九七五b）の一仮説、間口広く係っていく成分ほど前に来やすいことを、係りの広さの定量化と語順の推定モデル構築の方法で検証した。

なお、国立国語研究所（一九六四）には「（うけの）集中度の高いもの（係り成分）ほどへうけ√の近くにあることが危険率5%でいえる。」とある。集中度が高いとは係り間口が狭いことにはかならない。

#### 文献

- 国立国語研究所（一九六四）『現代雜誌九十種の用語用字』の「助詞・助動詞の用法」（宮島達夫執筆）  
 佐伯哲夫（一九七五a）『万葉・古今・新古今におけるかかり語順』（『計量国語学 七四』計量国語学会、のち拙著『語順と文法』（一九七六）、関西大学出版『・広報』部に収録）  
 ——（一九七五b）『現代日本語の語順』笠間書院  
 徳永健伸・田中穂積（一九九一）『結合価値情報に基づく日本語語順の推定』（『計量国語学 一八一』計量国語学会）